

創刊
準備号
3

2017年1月19日発行

福祉と介護のミニコミ誌

ふいねず



(画 amor amigo)

Topic

特別寄稿・日常生活圏域の核となる「地域拠点のあり方」

連載 心地よい関係性のバランス

地域でつむぐ

起業・就労・支援の間で…

Information 福祉・介護・まちづくり等のイベント情報欄

特別寄稿

日常生活圏域の

核となる

「地域拠点」のあり方

(3)

山越孝浩

そのために、確保すべき事柄は5つである。

①安心して過ごすことのできる場所（住まいや居場所）

②親しく話ができる知人、友人、隣人、家族等がそばにいる（つながり）

③日々の暮らしで自分の生きがいや役割、楽しみがある（生きがい・役割）

④困ったときに助けると言える人や関係があり、必要なときにおすすわけ（活用）できる（生活支援）

⑤体調管理ができ、心身の状態に合わせて、そのときどきに適切な医療や介護が受けられる（医療・介護）

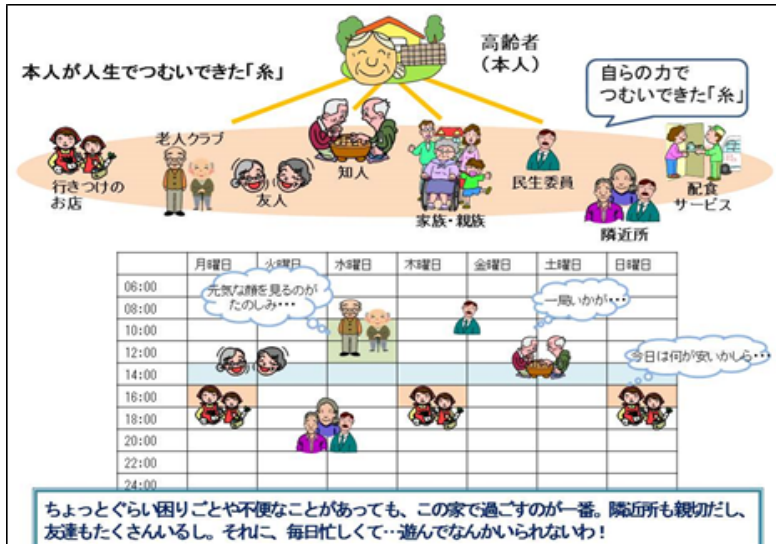
住むことで認知症が進んでしまったというケースも少なくない。逆に知らない地域に移り住んでも、主体的に動くことができればそこが本人にとっての居場所になり、安心を得られる。

主体的な行動には「役割」や「生きがい」がある。役割があるとその場に居ることができる。それは自分が居てもいい場所と理解することもでき、役割があるからいたい場所にもなる。逆に何も役割がない場所にいると、手持無沙汰になり、落ち着かない。役割がある場所を探してしまう。

居心地が良い場所とは、単なる気持ちが良い場所ではなく、そこに居ても良いというメッセージを実感できる場所であり、そのような場所において得られるものが安心である。

よって、主体は提供者側ではなく、本人が主体となる。

(3) 本人が主体となる支援の視点



(1) 地域で安心して暮らすこと
地域福祉コーディネーターが目指すべきは、高齢者をはじめ、すべての住民が自宅や地域で安心して過ごすことができる社会の実現である。そのために常に具えていなければならない視点がある。それは「主人公は住民」であることである。

(2) 地域福祉コーディネーターが目指すべき、本人にとつての安心とは
安心とは、提供するものではなく、安心できる状態をつくること
ができて初めて実現できるものである。
自宅であっても、子どもに引き取られた関係性のない地域に移り

元気な時には、親しい友人や隣近所とお付き合いしながら、自身で暮らしをデザインし、行動してきた。自ら人や役割とつむいできた見えない糸のように。
1週間の過ごし方を見ても、毎日を忙しく過ごし、168時間では足りないくらい充実した日々を過ごしている。
しかし、これまでできていたことが、できなくなり、友人や隣近所と関係も希薄になる。

日々の生活も、自らゴミ出しができなくなったり、行きつけのスーパーに行く道順がわからなくなってしまうと、失敗が多くなる。地域福祉コーディネーターの役割はどこになるのだろうか？

これまでの生活を、軒下マップを作成せずに、支援やサービスで補おうとすると、本人の望む暮らしではなく、援助者側（専門職の目指す暮らし）になってしまう

地域福祉コーディネーターに求められることは、本人がどこで、どのように暮らしたいかを本人に代わって言葉にし、実現すること。よって、これまで本人がコーディネーターしてきた生活をガラリと変えるのではなく、これまでどおりの暮らしを取り戻すためにできることは何かを考えること。

地域福祉コーディネーターの実践では、これまでどおり老人クラブに顔を出すために、老人クラブの仲間をお願いし、自宅まで迎えに行ってもらえれば、道に迷わず老人クラブに行くことができることであつたり、いつも気にかけてくれる隣近所に、認知症や身体機

能低下によってうまく言葉で表すことができない本人に代わって、向こう三軒両隣としてゴミ出しや見守りをしていることに感謝の言葉を表すことである。それは、これまで培ってきた本人の暮らしを「つむぐ」ことや「本人の役割・生きがい」を生かす支援である。

地域福祉コーディネーターは、自事業所の利用者（介護保険対象者）の地域生活支援のための協力者づくり（軒下マップや会議）はもちろんのこと、不安や困難をかかえる高齢者に対して、本人がつむいできた関係性や地域にすでにある力や潜在的な力を生かす働きかけ（福祉のまちづくり機能）をすることが、日常生活圏域ごとに設置されている「地域福祉コーディネーター」に求められ、地域の拠点としての役割を担うことになる。

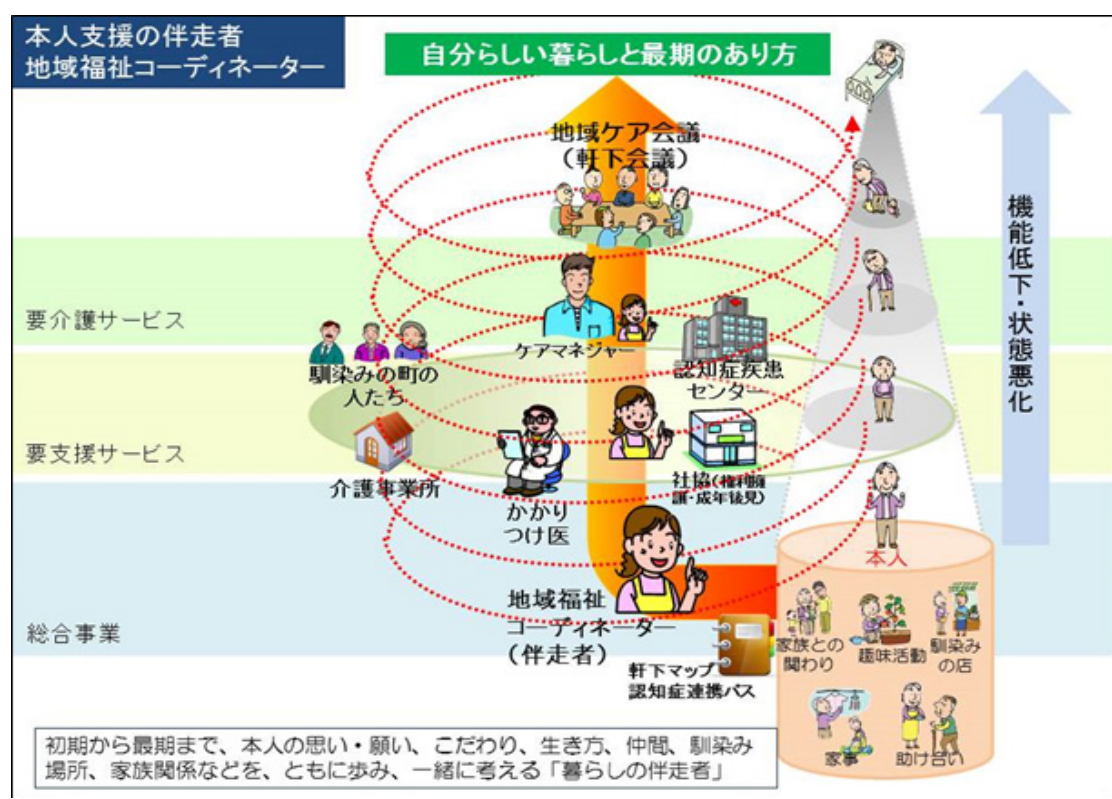
（４）早めに出会い、ともに生活する伴走者として

近所の方々に気にかけて、心配し、時にはちよつと手を貸すことができる時期から出会い、自身の生活

で困りごとや心配事が出てきても、できることは自分です。とくに担い手であり、あるときにはお手伝いいただくようなシームレスな関係が地域にはある。

地域福祉コーディネーターは、早期に出会い、常に本人とともに歩む伴走者である。途中、要介護状態になり、ケアマネジャーへバトンを渡す時期が来たり、医療機関へバトンを渡す時期が来たり、地域福祉コーディネーター（伴走者）が小さくなくても、ともに歩むことは変わらない。

特定の「一人」のためにネットワーク



を一人ずつ構築し、一人ひとりと繋がる糸を丁寧に紡ぎ、支えることができるつなぎ役であり代弁者であることが重要である。

（つづく）

心地よい関係性のバランス

第15回 「聴く耳」も鍛える

聞けなくなっている？

専門学校で非常勤講師をしているのだが、最近、学生たちが「聞けなくなっている」ような気がする。

「さうだろー！」などと野次を飛ばすが、そのやりとりさえ聞いていないように「2番ができません」という声が、あちからもこっちらもあがるのだ。

授業中、課題を書いたプリントを配りながら「まだやらないでください」とか「今は1番だけやってね。2番は解説が終わってから

こういう出来事は、重い知的障害の人や自閉症の人たちとの関わりの場合だったら不思議はない。お菓子を見せながら「絶対に食べちゃだめだよ」と言うと、言った

ら入ったメッセージだけが最初に脳に届き、耳から入ったメッセージはどこかの迷路に迷い込んで、出てくるのにすごく時間がかかったり、出られないままに忘れてしまったりする感じだ。だから、支援をするときは、先に間違った情報が目から入らないように工夫することが大事になる。でなければ彼らからすると、「食べる」というから食べたのに叱られた」というような事態にすぐなってしまふ。これでは、支援ではなくて意地悪だ。

耳より目に頼っている

ような気がする。明らかに10年前の学生よりも、今の学生のほうが耳より目に頼っているように感じる。考えすぎかもしれないが、やはりメール世代の子どもたちということなのだろうか。メールの批判をしたいわけでは、もちろんないのだが……。

う。教室中がざわついていたとか、私の声が小さすぎて聞こえなかったというのなら仕方がないが、彼らは静かに聞いている（ように見える）。「2番は解説が終わらないとできないから、まだやらなくていいです」と言っている途中で、「先生。2番はどういう意味ですか？ 意味がわからなくてできません」と質問が始まる。もちろん聞いている学生は「だから言って

そばから食べてしまふ。言葉がわかる人には、「我慢ができなかった」と映るかもしれないが、本当は言葉が通じないときに起こる現象だ。特に自閉症の人たちの場合は、ちよつと独特で、たとえば言葉がわかる人でもこうしたことはよく起きる。彼らは目と耳の両方から情報が入ると、基本的には目から入った情報を優先する。目から「食べなさい」というメッセージが入り、耳から「食べてはいけない」というメッセージが入ったとしたら、葛藤する間もなく、目か

学生たちも、「課題をやれというからやったのに叱られた」と思っていないだろうか。そんなわけはないと思いつつも、やや不安を感じてしまふ。もちろん、これは確証のない話だ。10年前の学生と今年の学生をきちんと比較したわけでもないし、10年前の学生も私が気づいていないだけで、同じ行動をとっていたのかもしれない。でも、やはり明らかに違ふ

自分も含めて最近では、耳より目が鍛えられる環境にあるのかもしれないと思う。コミュニケーションの手段が言葉よりメール重視になっていけば、当然「音声」以外の情報から相手の状況を判断する癖がつく。学生時代、先生の話す口調や、力説する雰囲気、試験に出る問題を上手に予測していた私の耳も、インターネット文化の中で、睡眠状態に入っていないだろうか。そんなことを考えたりする。いろいろな脳の「かたち」をもつ人たちと関わっていると、人間の脳は実に環境に適応するのが上手だという気がしてくる。だからこそ、うつかりすると本当は使えるものを簡単に倉庫に入れてしまふようなことも起こるのかもしれない。それともこれは、進化

「観る目」だけではなく「聴く耳」も！

※この原稿は、Juntos（フントス）CLC 発行の情報誌からの転載です。著者と発行者承諾のもと転載しています。

大友愛美（おおともよしみ）

北海道生まれ北海道育ち、生粋の道産子です。大学卒業後、最初の福祉現場、知的障害者入所施設では地域と施設をつなぐコミュニケーションワーカーのような仕事をし、その後は地域で生きる人たちを支える仕事をしました。どちらの現場でも自閉症の人たちとの出会いが多く、たくさん悩み、たくさん学びました。

最近では、共生社会の実現を目指すNPO法人での仕事や、福祉の担い手を育てる場（学校や研修）での仕事をしつつ、自閉症など地域で生きにくい状況を抱えた人たちの相談や支援の仕事もしています。他の多くの人と違っていても排除しない、されない社会の構成員になるためには、学ぶだけでなく、いろいろな人と一緒に暮らす練習が必要なのかもしれないな…、と感じている今日この頃です。

地域でつむぐ

12月によつてがいんで行った餅
つきの話です。

今年で6回目となった餅つきは、毎年の恒例行事です。

今年の会場は例年と場所を変えよつてがいの建物の隣で新たに始まる事業所を使つて行いました。参加者は34名が集まり、半数の方が飛び入りで集まつて来てくださった地域の方でした。

朝に利用者さんが各方面から集まってきた午前10時ごろからお米を蒸かして取り掛かると、地域の人もお手伝いしてくれ、杵と臼を使ってお餅をつき始める頃にはすっかり打ち解けてつき手と返し手も自然に決まりました。

参加する人達で協力して順番につくお餅つきは、その作業自体がとても盛り上がりました。どんどんつきあがるお餅も手伝いを申し出てくれ近所のお母さん達によって手早くお雑煮とあんこ餅、ゴマ餅にしてもりました。

今回は10キロのお米をつきました
たができた料理を食べだす

と、お雑煮などはお餅が先になくってしまいお出汁を後から作っておかわりの鍋を用意したほど人気がでした。

餅つきを始めた切っ掛けは、まだNPO法人お茶っこケアが立ち上がる前の前身ボランティア団体が拠点としていた場所の近所に住む方達が、沿岸部程は被害の酷くない内陸部に住む自分たちが何か出来ないかと相談を受けたのが最初でした。

その後は、団体と地域住民の方で協力してイベントを催し、中でも喜ばれたのが餅つきで多い時には毎週のように色々な場所で行いました。その後お茶っこサロンとして独立して、沿岸部のサロン活動を行っていた場所に引越してからも、当時からお手伝いしてくださる地域の方々を行うお餅つきはお茶っこケアで例年欠かすことの出来ない人気の行事になりました。

(よつてがいん代表 粕屋裕之)

フリーダイヤル つなぐ ささえる

0120-279-338

よりそいホットライン

**24時間
通話料無料**

- 心の悩み
- 学校の悩み
- 法律の悩み
- 子どもの悩み
- 自殺念慮
- セクシュアルマイノリティの悩み
- 被災者の悩み
- 人間関係の悩み
- 職場の悩み
- 住居の悩み
- 外国人住民の悩み
- DV・性暴力の悩み
- 仕事の悩み

CLICK!

連載

起業・就労・支援の間で…

「たくさん売れる〓工賃が上がる」の落とし穴

(「コミュニケーションワークス」理事長 筒井啓介)

障害福祉サービスのうち、就労

継続支援B型事業所などのいわゆる

「福祉作業所」「授産施設」と

言われているところでは、企業か

らの委託による内職作業の他、オ

リジナルの商品づくりに取り組ん

でいる事業所がたくさんありま

す。私自身も同じような事業所を

運営していることもあり、商品づ

くりについてのご相談を頂くこと

があるのですが、その多くが「自

分たちの事業所で作った商品がど

うしたらもっとたくさん売れる

か」という内容です。

利用者さん（障がいのある方）

が一生懸命作った商品を1つでも

多く売り、利用者さんの工賃（賃

金）を少しでも上げたいと考える

のは担当職員であれば当然のこと

です。その気持ちは大切にした

のですが、たくさん売れる〓工賃

が上がるということでは決してあ

りません。どうということでしょう

か。

例えば、クッキーを1袋100

円で販売しているとします。1袋

売れた場合、100円がそのまま

利益〓工賃になるわけではありま

せん。この100円の中には、小

麦粉や砂糖などの原材料費、袋や

ラベルなどの資材費、さらには製

造場所の水光熱費などが含まれる

ため、これらの費用を差し引いた

額が利用者さんの工賃となりま

す。なかなか工賃が上がらない

からもっと商品をたくさん売りたい

い、とご相談にいらっしゃる方

のお話やその商品のことを詳しくう

かがついていると、この費用の割合

がすごく大きいことが多々ありま

す。一般的には原価率3割などと

言われていますが、資材費や水光

熱費を含めても4割程度に抑えな

いと利益は確保できません。とこ

ろが、その費用の割合が6割や7

割、ひどい時には9割が費用！な

んてこともあります。9割が費用

だった場合、1袋売っても利益は

たったの10円です。100袋

売っても1000円。クッキーを

作るのにもそれなりの手間がかか

るわけで、これではどれだけたく

さんの注文が入っても、利用者さ

んは疲弊するだけで工賃には結び

つきません。

少しでも安くして多くの人に購

入してもらいたいという気持ちは

よく分かります。こんな高い値段

で売れるのだろうか…という不安

があることも理解しています。そ

れであつても、利用者さんの工賃

を上げたいと考えるのであれば、

原材料費などをしっかりと計算を

して、適正な販売価格を設定する

べきだと私は思っています。そし

てその価格でしっかりと販売がで

るだけの品質やパッケージデザイ

ンに仕上げる必要があります。何

より日々一生懸命作業に取り組ん

でくださる利用者さんの価値を私

たちは決して安売りしてはならな

いと思うのです。

Natural Café+Shop hanahaco

営業日：11時～16時（定休日：火曜）

木更津市矢那 1879-1

電話：0438-38-4368

メール：info@npo-cw.net

Facebook

<https://www.facebook.com/hanahaco.k/>



Information 福祉・介護・まちづくり等のイベント情報欄

1月10日までに、編集部へ届いた情報です。詳細は、各情報の連絡先にお問い合わせください。また、情報欄への掲載を希望する方は、編集部までご連絡ください。

《第22回 街CAFE さくら》

【2月の催し物】

「認知症サポーター養成講座」

日時：2017年2月19日（日）

13：00～16：00

会場：東金市東金 1060-6

（SUNFLOWER 1F内）

参加費：100円（お茶代）

問い合わせ先：社会福祉法人ゆりの木会内

認知症カフェ担当 平賀・笠原 (0475-50-8111)

《穂垂るの会》

介護している方々が集まって日々の苦労話等を気軽に本音で話し合う会です。

日時：2017年2月9日（木）

13：30～15：30

会場：ふれあいセンター 2階 創作室

経費：200円（昼食代）

主催・連絡先：穂垂るの会・井上

（090-7171-1701）

《東金市生活困窮者自立支援セミナー》

日時：2017年2月10日（金）

13：30～

会場：東金市ふれあいセンター

内容：基調講演・こころん活動紹介

講師：日置真世

（社会的包摂サポートセンター）

参加費：無料（※チラシあり）

主催・連絡先：ちば地域生活支援舎

0475-53-3630

《子育てサロン②》

日時：2017年2月20日（月）

10：30～12：00

会場：鵠嶺の家（児童）

東金市東金 425-2

内容：子育てについての困りごとや情報交換など

主催・連絡先：ちば地域生活支援舎

子ども支援センターぽけっと

0475-50-1081

《ケアワーカーキャリアアップ講座》

日時：第1回目 2017年2月10日（金）

第2回目 2017年3月20日（月）

会場：東金市ふれあいセンター

内容：「多様性の理解と支援に向けて」

講師：第1回目 日置真世

第2回目 大友愛美

参加費：無料（※チラシあり）

主催・連絡先：ちば地域生活支援舎

0475-53-3630

《共に暮らすを考える集い》

日時：2017年3月20日（月）10：30～

会場：東金市ふれあいセンター

内容：基調講演

講師：大友愛美

参加対象：障がい児・者保護者 他

参加費：無料（※チラシあり）

主催・連絡先：ちば地域生活支援舎

0475-53-3630

《コミュニティケアワーカー実践講座・君津》

日程：2017年2月1日（水）

9:00～12:00 ライフサポートプランを学ぼう

13:00～16:00 チームケア

会場：君津市保健福祉センターふれあい館

参加費：無料（※チラシあり）

主催・連絡先：ちば地域密着ケア協議会
043-244-2601

《ノーマライゼーション学校支援事業》

日時：2017年1月28日（土）

会場：千葉県教育会館 203 会議室

内容：「誰にでもできる支援へ向けて
—小学校通級指導教室より」
「誰にでもできる支援へ向けて
—暮らしの中から」

定員：100名 参加費：各1,000円（資料代）
問合せ：ちばMDエコネット事務局
047-426-8825

《コミュニティワーカー実践講座・八街》

日程：2017年2月7日（火）

13:00～16:00 地域との関わり視点

2017年2月8日（水）

9:00～12:00 ライフサポートプランを学ぼう

13:00～16:00 チームケア

会場：八街市役所第1庁舎3階第1会議室

参加費：無料（※チラシあり）

主催・連絡先：ちば地域密着ケア協議会
043-244-2601

《若年認知症の研修の件》

日時：2017年2月9日（木）

会場：千葉県庁中庁舎 10 階会議室

内容：「認知症との歩みから…仕事と
暮らしを考える」

「認知症になっても、これまでの
仕事や暮らしを続けるために必要なこと」
参加費：無料（※チラシあり）
主催・連絡先：ちば地域密着ケア協議会
043-244-2601

サポート会員募集

「ふれーず」の編集・発行を応援いただけるサポート会員を募集します。

応援いただける方は、ぜひ、ご連絡ください。

【内容】

会費：1口3,000円（※個人・団体）

期間：年度単位

【連絡先】

特定非営利活動法人ちば地域生活支援舎
総務・企画課（0475-53-3630）



＜表紙画 amor amigo さんの紹介＞

イスラエルに縁ある夫、ペルーに住んでいた妻、17歳差の夫婦ユニット。
山口県萩市で私たちが娘と暮らすのは、毛利の殿様が参勤交代で通ったお成り道に面した築200年の古民家です。そこで、イラスト業と並行しつつ、祖父から注いだ画材屋、重厚な梁が残る古民家BAR、ピタサンド専門店、アート教室などを営んでいます。

発行元：ふれーず編集部
千葉県東金市東金425-2（鶴嶺の家内）
TEL：0475-53-3630
編集責任者：宮下・太齋
発行部数：500部

明けましておめでとうございます。今年も宜しくお願いします。ふれーずの本発行及び内容の充実を図れるようさらに頑張りますので、ご協力をよろしくお願いいたします。（To）